



「研究留学に関するアンケート 2013」

- ダイジェスト -

海外には自由な雰囲気、共同研究や人的交流の機会があり、雑用が少なく、そして有能なボスがいる。留学先から給料を貰うのはもはや主流。語学力向上、留学先ラボの情報収集に力を入れるべきだったと反省。3年程度を見込んだ留学は更に長くずれ込みがちであるが、留学を長すぎたとは感じず、もっと居たいと思うのが多数派であった。研究成果は期待ほど出ない場合が多いが、それでも得るものは大きく、留学について後悔したのは1%以下であった。留学後の将来展望は柔軟に考えているものの、日本に帰れなくなる可能性や情報不足の危機感が強い。海外日本人研究者のネットワークと、留学後のキャリアパスの整備は渴望されている。

※ 全集計結果はこちら（ <http://www.uja-info.org/2013mbsj/2013UJASurvey.pdf> ）

※ 以下のカッコ内数字は参照先の「[全集計結果](#)」の設問番号に対応しています。

- 背景 -

これまで海外の日本人研究者について包括的に把握している機関はなく、日本の政府・行政機関は、日本とつながりのある留学者（日本の機関に籍がある・公的制度で留学している）を中心に対象として調査し、日本に籍を置きながら留学するケースが顕著に減少しているデータでもって“内向き志向”といった印象論を展開してきた。しかし、ただ欧米に留学すればそれで箔が付くような時代でもなくなってきている今、大学業務の負担増や若手ポジションの減少と過度な競争が本質的な背景で、むしろ日本に籍を残さずに世界に飛び出して活躍する日本人研究者は増加しているのではないかということが示唆されている（例：<http://ssu.mri.co.jp/columns/articles/vol160>）。このような実態を正しく把握して世界中に散らばった日本人のネットワークを強化して活用することは、個々人としても国家としても世界的な競争の中でプレゼンスを高め、戦略的かつ効率的に主導権を掌握する上で極めて重要なはずである。

そのような理念の共有から海外日本人研究者の有志として JSPS-Washington Office の協力も仰ぎつつ、自助・互助的な組織として UJA を立ち上げ、ボトムアップでネットワーク構築を開始した。今回、日本分子生物学会の企画に併せ、研究留学の実態についての大規模アンケートを行った。



- アンケート方法 -

2013 年から 9 月から 11 月までウェブサイト上のアンケートフォームで実施。無記名で滞在地域と所属について質問、Cookie の設定で重複回答を避ける。参加呼びかけは分子生物学会年会のホームページからのリンク、UJA 参加メンバー・コミュニティー、各協力団体への連絡、UJA ホームページや Twitter, facebook での拡散など。

設問は選択式を中心とし一部でコメント記入、また「留学中」「留学経験あり」「興味あり」「興味なし」の属性で設問を分岐。回答時間は 15 分程度を想定。

- 回答者の状況・内訳 -

回答頂いた 533 名のうち 326 名が留学中、134 名が留学経験あり、69 名が興味あり、4 名が興味なしという内訳 (2)。回答に際して分野や立場を限定はしていないが、生命科学系がやはり多いのではないかと推測される。留学先の国はアメリカが多かったが、ヨーロッパ諸国、シンガポールなどの回答も少なからずあった。(23-25)。

年齢構成として留学中は 29 歳から 39 歳がボリュームゾーン、興味ありは 20 代前半がピークで 30 代まで幅広くあり (1)。家族構成は独身が半数以上、子連れは 3 割程度、現地で共働きは少ない (16-17)。

留学中の立場としてポスドクが 7 割強、学生が 1 割程度であり、8 割以上がパーマネントの職ではない (7-8)。動機としては「研究の幅を広げたい」「英語を含めたコミュニケーション能力の向上」というのが多く、「海外でしか出来ない研究だから」という回答はやや少なかった (9)。単純に研究設備等の水準として日本が海外より遅れているということは感じられない中で国際化への問題がより意識されているのではないかと。

留学開始年齢は学部卒業後と思われる 20 代前半に小さなピーク、そして博士課程修了後と思われる 27 歳以降から急激に増加、30 代後半から減少していた (6)。留学期間について半数以上は事前に定まっておらず、定まっている場合は 2 年ぐらいという回答が多かった。これは日本で得られるフェローシップの多くが 2 年以下に設定しているものが多いことに関連しているかもしれない。留学期間が定まっていない場合、当初見込みでは 3 年以上が多かった。実際の留学期間について、2 年程度までの留学は当初見込みとの差が小さいが、3 年以降、見込みより長くなるケースが増えるようである。また半数以上が次の職を得たという理由で留学を終了している。気持ちとして早く帰りたいのは 1 割程度である。留学支援制度として 2 年を超えるもの、留学期間を延ばせるものに潜在的ニーズがありそうである。帰国する際の立場は半数弱が任期のあるポジションであった。元の所属ないし関連する場所に戻るケースが最も多く、次に公募と知り合いのつてが同程度である。

- 留学に興味のある方へ -



留学中の収入源は留学先からというのが最も多く、その次に奨学金・フェローシップとなった。一方で留学に興味のある人にとって留学先から貰うというイメージは非常に小さく、現実との情報ギャップがあるようである。また経済的問題とともに語学力を留学の障害と感じているが、実際の事前自己評価は留学中・経験者との回答と大差は無く、「日々精進している」、「努力して克服したと」いう人が多いが、「困っている」、「出来ないと割り切っている」人も 2 割弱あった。語学の問題は依然として大きい、それでも日本人研究者を雇いたいという海外での評価があるといえる。

留学でなければ得られなかったものは「幅広い経験」「人的つながり」「語学力」の回答が多い一方で「よい研究成果」「キャリアアップ」はやや少なかった (41)。またマイナス要素として「日本に帰れなくなる」と半数以上が答え、「留学後のキャリアパス整備」が重要であるとの回答は 8 割近くあった (42、44)。個人の能力アップにはなるがキャリアアップには直接つながらないとの見方ができる。

- 海外と日本の研究環境の優劣・留学先の選択について -

海外で日本より良いと感じる点は「自由な雰囲気」「雑用の少なさ」が最も多く挙げられ、「共同研究」「人的交流」「ボスの能力」が次に上位であった。一方で、「評価方法」「経済状況」「面倒見の良さ」「法律・規制」が日本より良いという回答は少なかった (26)。また当初の期待に対して「人間関係」「生活環境」は期待通りあるいは期待を上回ったとする回答が多い一方で、「研究成果」については不満とする回答が他に比べて少し多かった (29)。やはり今は留学に際して実質的な成果を挙げることを志し、またプレッシャーがあるのではないか。留学についての反省点は「準備不足」が最多で、コメントから語学力の問題が多いと思われる (30-1)。そのあと「情報不足」が続き、少し下がって「他の可能性の検討」「実力不足」「ラボ選択」も挙げられた。留学先研究室の選択には反省があるケースが多々あるのかもしれない。「留学しない方がよかった」という回答は皆無に近かった。コメント欄には多くの経験談が詰まっているのでぜひ参照されたい (30-2)。ラボ選択に際して、事前に問い合わせたラボの数は 1 つだけというケースが半数近くであり、興味ありとする人との感覚とは大きく異なる (11)。これは複数考えていても実際には最初に問い合わせた良い返事が来たらそこに決めてしまうからではないかと推測される。一方で複数問い合わせる場合は 5 以上にも数が伸びる傾向もあり、探し方は状況によって大きく分かれるようである。

ラボの決定において重視した (する) ことでは、留学に興味がある方・留学未経験者においては、「相手ボスの人柄・相性」、「生活環境」を重視する一方、経験者においてはこれらの項目の重要度は大きく低下する傾向がみられた。実際に留学する際に、こうした情報を知り得る機会が無かったからかもしれない (12-1)。また雇用条件について経験者ではあま



り重視されない傾向があった。フェローシップを得たからか、選択肢のなかで条件に大きな差がなかったからかもしれない。そのほか各自の貴重かつ具体的な経験談を多く寄せていただいている (12-2)。

- キャリアについて -

PIを目指す人（あるいはすでにPI）は7割弱、目指さないが研究を仕事としたい人が2割5分であった(5)。アカデミア以外のキャリアパスに興味があるとしたのは半数を超えているが、「応募書類を送る」以上の行動を起こしているのは2割程度であった(49-50)。キャリアパス多様化に対して有効と考える支援は「より深い情報の提供」「マッチングの場の提供」「資金的援助」などが有効だと思うと多数が答えたが、「教育・訓練プログラム」はやや低かった(51-1)。情報と機会の不足、また面接など就職活動の資金的な問題というのが実感としてあると思われる。体験に基づく多くのコメントをいただいている(51-2-1)。

- 分生ポスドク招致企画について -

留学中の人がこの企画について知るの、人づてで聞いてというのが最も多かった(53-2)。コメントの中には周知が不十分との意見もある。また企画に対する期待および評価は留学に興味ある人においては圧倒的であるが(56-1)、留学経験者としては注文もあるようである。特に額の10万円が少ないというコメントが目立った(55-2)。また応募条件・選考基準や地域などによる金額の考慮についても意見があった。これは分生側も承知の上で事務方の負担等との兼ね合いで決断したものと察せられるが、今後制度として定着するとなればまた議論されるであろう。

- JSPSの研究留学助成について -

JSPSは日本人が研究留学をするにあたって最も大きな支援母体であり、今回のアンケートでも研究留学に関する情報をぜひ活用したいとの要望があったので、JSPSの制度についての設問も含めた。実際に海外で研究するにあたってJSPSから支援を受けた経験のある割合は3割程度で、主に海外研究員ないし特別研究員制度であった(60)。制度への改善要望として、家族構成や地域の実態に合った支給額の調整、期間の延長あるいは留学後の帰国からキャリア形成までの支援、一時帰国の際の返金制度の緩和（条件および書類作業）が目立った。この実質的な一時帰国の制限や、海外期間2年でっきりで切れることが就職活動を配慮していないという主旨の指摘が見られた。近年の研究留学は次のキャリアが保障されていない中で実績をあげて就職活動もしていかなければいけないケースが多いので、



そういった事情に合わせた期間設定など制度の柔軟性、また帰国後のキャリア形成を支援する新たな制度が求められているのではないかと。もちろん JSPS の制度があったからこそ留学が出来たという感謝のコメントも多数あった (61)。

- 海外日本人研究者ネットワークについて -

大部分の人が海外において日本人研究者がネットワークを形成することはプラスだと回答した (57)。国の支援についてはボトムアップの精神を大切にすべきとの趣旨の意見があった。他の外国人は強固なネットワークを作って活用しているのに日本人はそういうのがないという意見が少なからずあった (58)。

- まとめ・国家戦略として -

不安定なキャリア見通しのまま世界の競争の中で勝負するという留学がかなり多くなってきているという実態がみえた。そのよりシビアな状況に配慮した支援や情報網が整っていないままでは、表面的な留学の数を増やすような単純に押し出す施策では問題が多いのではないだろうか。より実質的な成果とともに次のキャリアへと繋がる留学となるよう帰国後のキャリアパスを整備しつつ、多角的な支援と自助・互助を可能にするネットワークの整備こそが、日本（人）の国際プレゼンスと競争力を向上させ、科学技術分野で戦略的にイニシアティブを取っていくことにも繋がり、費用対効果からしても優先度の高い課題では無いだろうか。国としてのリソースに限られる今、行政側としてもより強い根拠と説明を必要としており、研究者もそのような行政の立場を理解しながら積極的に情報提供とフィードバックを行い、建設的で現実的な議論と提案をしていかなければいけない。